私は以上述べ來つた所によつて天下の王城としての君府の面目をほんの大體の上から紹介した。以上をいはば總說とすればこれから細目に入るべきである、因てこの次には古來君府の呼び傳へられたる種々の名稱を吟味してこの都が如何にまた世界的であるかを說いてみよう。（十一月廿八日）

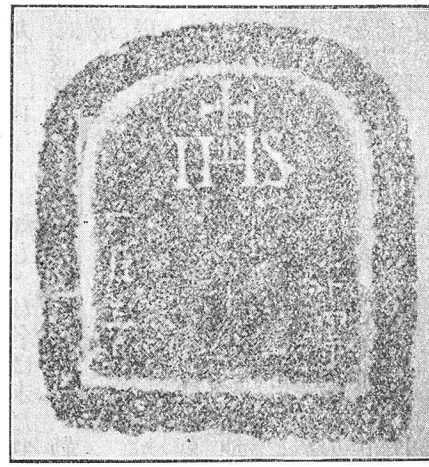
慶長年間の京都耶蘇信徒の墓碑

文學博士　新村出

大正六年下半期中、京都市西邊の寺院に於て慶長年間の耶敎徒の墓碑が前後二回、合せて四基發見せられたるは、奇異なる現象にして所謂南蠻寺院の位置を推定するについて、有力なる資料を供するもの謂ふべきなり。初回の發見は八月末の事に屬し、其地點は上京區御前通下立賣下る東側に位するさゝやかなる淨土宗の尼寺延命寺內なりとす。その發見の由來に就きては文科大學助手島田貞彥氏が考古學雜誌大正六年十一月號に報告せる所委曲を悉せり、今更めて贅せず。唯同寺の門前に住し檀家總代の勞を執らるゝ入江波光氏の注意力によりて該墓石三基が、門內の一隅に見出されし以前、夙く裏の竹籔より移されて一時（同寺改修前）庭前の手水鉢の邊に置かれたることあり、碑面に平假名文字の見ゆるが爲め、和歌の墓誌とて誤り稱せられしこともありける由、現住三村便應法尼より聞及べるを附加へおくべし。

三基の墓碑の形狀及び大小の測定は亦島田氏の圖說に詳かなれば茲に擧げず、直に墓銘の說明を試みんか。第一基の面には中央に平賀太郎左衛門まこい泰すの文字あり、右方に慶長十三年三月十日左方にさんおのりよの日と見ゆ。「まこい泰す」の文字を斯く判讀したる外、刻文極めて鮮明なり。

イネス IGNES は婦人の敎名にて慶長十八年の「江戸勢數多講定之事」(大日本史料第十二編第十二所引ローマ市バチカン文書館文書)の末に擧げたる講中の姓名のうちにも、同樣の字形にて見はれたり。サン・オノリヨは聖ホノリウス S. Honorius なれど同名の聖者多くして甚だ紛れ易かり。而も三月十日(太陽曆四月二十四日)に歿せし其人は容易に求め得ざりしが、遂に京都天主敎會のオリアン師の好意により、師が、友僚某師に尋ねられし結果、右は現墺領チロル洲ブリクセン Brixen の僧正(エヴェーク)なりと云へるとを聞き得たり。即ち碑銘の記する所、蓋しイネスなる婦人の命日が慶長十三年三月十日(西曆一六〇八年四月二十四日)にしてサン・オノリヨの命日に當るとを意味するなり。



第二基は中央に小川あふきやみしや、右方に慶長十五年十一月七日左方にさんとめいあほすところの日と明かに讀みわけらる。小川通(コガハ)なる扇屋のミシャといへる婦人の墓なるべし。ミシャは前記勢數多講中の連名錄のうちにも婦人名として出で、又太田方の編錄せる『契利斯督記』に擧げたる明曆頃の記錄なる「女のべヤト」の女子敎名簿にメシアと見ゆたると同一にして MEXIA なるべし。其命日は西曆一六一〇年十二月二十一日にして、正に聖トーマス使徒(セントアポスル)の命日に當る。但しサン・トメイ・アポストロ SAN THOME APOSTOLO は葡

蒭牙或は西班牙の稱呼に外ならず。

第三基は碑面甚しく磨滅して讀み得べからざる文字多けれど、上部に同じく十字章微かに見ゆるによりて同種の墓碑となすべく、中央なる人名はあふさやの□□と讀まれ、右方は慶長七年、左方は九月□日なるが如し。教名は未だ判ち難く、命日に該當する聖者又は使徒の歿日を勒せず、三基中最も單純なる形式なりとす。

以上三基の墓誌はいづれも名もなき士民のものなれど、從來知られざりし耶蘇徒の墓碑なるものの一種の形式を示すと同時に、發見地點が吉利支丹寺院の所在の方位を暗示することに由りて頗る有益なる資料たるを失はず。然るに墓碑の形式上一層價値大なるものが、之に次ぎて略、同じ方面の一寺院より發見せらるゝに至りしは、更に學界の爲に欣幸となさゞるべからず。大正六年四月予の上京中、東都の考古家林若吉氏を訪ふや、席に京都の同好小山源治氏も居合はされしが、林氏は新に得られたる舊耶蘇徒遺品の極めて珍奇なる數々を示されし後、曳尾庵（加藤玄龜、醫、文政末頃歿）の隨筆『我衣』中に、彼が文化九年五月京都に旅せし時、耶蘇徒の墓碑を發見せることを記したる一節を指摘して、その探求を希望せられしことあり。其書に云く、「北野より妙心寺前を過て大將軍といへる所に、願成寺とふ寺院あり、永祿年中信長公バテレンを信じて此邊に永祿山南蠻寺を營む、其墓碑なるもの一基、此寺の庭に手水鉢になりてあり、先年其圖好古錄の中に出たり、今日此通りなれば立よりて其石を蠟墨にて摺、石の肌あらくして大形うつらず、其又一つは同所中溝の岸にあり、半土に入て寫す事不能」。著者はかくて「吉利支丹石墓」の略圖を載せ、異體の象形を書き、單に「此よふに見ゆ」と註したるのみにて字形を判讀し得で止みぬるが如し。同書中願成寺は

成願寺の誤なるが、一たびその圖を掲げたりといふ好古錄とは、曳尾庵の自著にや、また他の好事家の著作にや、知るを得ざるは遺憾なり。かくて予は歸洛後、五月中、間接直接に同寺に就きて探りしことありしも、執着の念薄く未だ深く探るに及ばざりしが、十一月十九日に至りて在洛中の林氏は小山氏と共に自ら成願寺に赴かれ、直に疑問の墓碑の手水鉢を發見し、且つ之を拓して、予に報告せらるゝに及べり。予わが探求の至らざりしを悔ゆると共に、兩氏の新發見に對して異常の欣喜を感じ、越ねて三日、兩氏及梅原末治氏と同伴して成願寺に趣き、初めてその所在、形狀及文字を確知するを得たるなり。この墓石今前回の三墓と共に文科大學考古學研究室に在れば、遠からずその形狀の圖取り、大さの測定等報告せらるゝ機あるべく、その拓本は本誌に掲載せらるゝ所によりて知るべし。今姑く一言せば、質は花崗石にして西洋式の墓石と同じく高めの蒲鉾形を成し、高さ一尺二寸程、幅一尺餘長二尺程に過ぎざる極めて小形のものとす。前側面には緣ありて、その平面の上部には十字章(大小二章)下に IHS の記號を刻す。これ耶蘇會の記章にして、現に妙心寺春光院所藏の國寶南蠻寺古鐘の銘にも之を認むること人の知れるが如し。右記號は IESUS HOMINUM SALVATOR といふ拉丁語の首字を取りたるものにして、原意は「耶蘇、人類救濟者」の義なり。記章の下には(るしや)(るしや)と刻す、上記の勢數多講中及女子ベヤト姓名錄の中にも見ゆる婦人の敎名にして LUCIA と綴る。右三字の上方左右に割れて、平假名文字各二三字見ゆるやうなれど、右方最初の一二字いしと讀み得べき外判明せざるは惜むべし。敎名の左右には例の如く其人の命日刻せらる慶長十四年(右)五月三日(左)とありこの墓碑には下に相當の大さの臺石のありしな

るべしとは、濱田教授が、北京に於ける明末清初の耶蘇宣教師の墓碑の寫眞及び見取圖を指摘して予に注意せられし所にして、予も亦その然るべきことを信ぜんとするなり。唯この墓碑が嬰兒のものかと覺しきばかりに極めて小形なるは、如何なる故か。火葬に附して遺骨をのみ埋めしにやと思へど、宗旨上いかにや。

墓石の傳來は明かならず又現在の位置に移されし時代も定かならざれど、三四十年來その所在殆ど變らざること、現住職藤井貞存師等の言に徵して知らる。文化九年曳尾庵の眼に觸れし以前、いつの頃手水鉢に改鑿せられしか、亦記錄口碑の據るべきなし。唯同寺に、唐紙に打ちたる古き拓本存し、その紙面右肩に朱筆もて「西京大將軍成願寺石盟銘」と題し、「慶長十一年五月三日、イスハ等の字、中央下段字不見」と記るせるものあり、又別に稍々新しき半紙の拓本の、文字極めて不鮮明なるもの一葉あり、共に袋に納めて保存せられ、袋の表面には、慶長十一年成願寺水盟伊斯把泥亞字彫銘と標したり。十一年は誤讀なること言ふまでもなし。文字好拓本によれば、維新以前相當に古き時代に成りしものと見ゆ。林氏は文政頃の手にや、天保は下らざるべしなど考へられしやうなり。姑く記して參考に供し、且つ該墓誌研究の經過を示すの料に備ふ。

以上の如く既に明かに知られし兩寺三基の墓碑が、同じく女子なるは、奇なるが、兩刹共に淨土宗なるにつきては、因緣なきにあらじと思はるれど、今は論ぜず。又成願寺發見の一基が耶蘇會徒の墓なるに對して延命寺發見の二三基が同じ會衆のものなりや、將たフランシスコ會などのものなりや、未だ明かならず。十字章其他の徵象に據りて知らるべきか否か。

成願寺境内又は附近には、尙一基の墓ありしこと

曳尾庵の認めし所なるが、今やその形をあたりに現はさず、他日の探究に待たんと欲す。終に附記したきは、同年六月、予が長崎に出張して、稻佐の悟眞寺(淨土宗)に舊阿蘭陀人の墓地を探るや、一隅に右方手前、蒲鉾形の大なる耶教徒の墓碑の存するを發見したり。長さ四尺に近く、三箇の石を連接せるものにして、表面には銘文なく、一端の側面に、大な十字章下に例の IHS 三文字を結付けたる記號を刻し、その面の縁にはローマ字らしき文字彫りつけられたり。予は同行せる長崎の探古家古賀十二郎氏に之を指摘し、その研究と發掘とを希望しおきたりしが如何になりけん未だ報道に接せず。大小の差こそあれ形式に於ては成願寺の分と似たる所大にして、彼此相比較せば或は得る所なきにあらざるべし。予輩は切に同地に於ける攻究の進まんことを望みて止まざるなり。

若夫れ、京都の所謂南蠻寺の位置に關して今回の發見より得たる暗示が、從來東西の史乘地誌によりて識られたる結果と相待ちて、そのがはの攻究を一歩進め得べきことは、疑なしと雖も、それらの點につきては別に論せんことを期す。南蠻寺の破壞等に關しても、其節説及ぶ所あるべし。

(大正六年十二月四日)

加藤清正の間島進入に就て

陸軍歩兵中佐　竹内榮

緒言

豊臣秀吉の外征は、單に其の結果より觀れば、失敗たるに相違なきも、興國日本の海外發展史を飾るべき、一大壯擧たるを失はず。秀吉外征の目的が、東亞の大陸を攻略して一大帝國を建設せんとするにありたるは、疑を容れざる所にして、秀吉は今日の所謂亞細亞主義の第一開拓者と謂ふべし、就中秀吉の驍將加藤清正は、此開拓者の急